

透析中のシャント痛に対する安楽な上肢位と運動の検討

長崎腎病院

○山下亜希 米田千恵子 林 涼子 田川芙由子 白井美千代 丸山祐子
船越 哲 原田孝司

【目的】

透析中のシャント肢痛は、様々な要因で発生するが、不自然な肢位であることが増悪因子となる可能性がある。よって、透析中の安楽な肢位の角度を検証し確定することで疼痛緩和を図る。

【方法】

当院の外来維持透析患者 292 人のうち透析中にシャント痛がある患者 121 人中 89 人に聞き取り調査を実施した。リハビリテーションにおける良肢位を参考とし、透析中の上肢保持角度による疼痛の変化を NRS スケール (numeric rating scale) にて調査した。

【結果】

透析中に最も痛みが軽減する角度は、肩関節外転 30 度 (平均 NRS4.2)・肩関節内旋 60 度 (平均 NRS4.6) 肘関節屈曲 75 度 (平均 NRS3.8)・手関節掌屈 10 度 (平均 NRS3.2) などであった。また、透析中に前述の肢位のままとした群に対し、1 時間毎に軽度 (20 度以内) の位置変換をした群では痛みが有意に軽減した (平均 NRS6.2 : 3.4、 $p < 0.05$)。

【考察】

従来検討されることの少なかったシャント肢位の検討により、透析中のシャント痛を軽減できる可能性がある。また、透析中の姿勢について、「動いてはいけない」という患者の認識を払拭し透析中に軽度の位置変換させることも有用と思われる。